

「ジャーナリズムの転換点としての 3.11」

東京新聞論説主幹 山田哲夫

僕は東京新聞の論説主幹という紹介を受けました。なかなか複雑で、(中日新聞)社がどういう構造になっているかといいますと、名古屋にあるのが中日新聞本体です。そして中日新聞の東京本社が発行している新聞は東京新聞、こういう関係になっています。名古屋で発行しているのが中日新聞、東京で発行しているのが東京新聞なのですが、僕の担当しているのは社説部分です。それから下にはコラムがあります。東京新聞ですと「筆洗」になるのですが、そこを担当しています。紙面的には東京新聞と中日新聞、社説はまあ一緒です。時々、名古屋がオリジナルな社説をちょっと書いてという、そういう感じになっています。だから社説については、東京と名古屋はほとんど一緒なのですが、紙面構成はかなり違うという印象になっています。

1. 「果敢なるジャーナリズム」

まず、冒頭に言いたいことがすべてです。この「果敢なるジャーナリズム精神とは何なのか」とこういう話をしたいと思うのですが、最初に、東京新聞の原発取材班というのが去年12月に菊池寛賞を受賞しました。そこにあるのは、「情報隠蔽しようとする政府や東京電力を告発し続けた果敢なるジャーナリズム精神に賞を出す」と、こう書いてあります。それは事実には違いないのだけれども、それだけではそんなに支持は受けないのではないかなという想いが僕にはしていました。それで最初に安野(光雅)さんが、ここにあるように東京新聞のこの菊池寛賞の受賞について「涙ぐましい」と書いたんですね。これはどういうことなのかなということなのです。安野さんは、ご存知の方もいると思うんですけど、86歳で去年文化功労者になりまして、司馬遼太郎さんの「街道をゆく」の挿絵だとか、それから有名なのが「だまし絵」というようなものですね。かなり有名な方で、これは東京新聞が好んで自分の喜びを書いてもらったわけではないのです。要するに、(月刊)文藝春秋の中の「菊池寛賞受賞を喜ぶ」というのがありまして、その中で安野さんが自主的に書いてくれています。ということが書いてあるかといいますと、ちょっと読みたいと思っているのですが、「この受賞に涙ぐましい感じがしている」とまず書いてあります。「取材班のこれまでの努力を思うのはもちろん、この賞を与えた英断にも敬意を表したい」と書いてあって、安野さんがどう言っているかというのと、「自分の友達の中で全く政治に関心を持たなかった男がいて、だけどその男も今度の原発だけには関心を持った」と、こう書

いてあります。ところがその次が重要で「その男が世論調査とか首相官邸の集まりがあったのだけれども、そういう声が届くべきところに全く届いていない」と。「その時に東京新聞がその切実な声を、民の声を集めて、それから届くべきところに届けさせるという作業をしてくれていた。これは本当に心強い存在であった」とこういうふうに書いてくれていた。「国難というのは、日本人が誰もが心をひとつにして立ち向かうことではないのだろうか。そういうことではないのかと他のメディアに聞きたい」と、ここに書いてあります。要するに他のメディアはそんなことしてないのではないかと、こう言っている訳なのです。この前の戦争の時に、メディアはどのように働いていたかを思うと、東京新聞の涙ぐましい報道は後世において必ず評価されると。

要するにこれはどういうことかと言うと、政府の状況や東京電力の発表そのものではなくて、自分たちで取材して、発掘して、色んなことを伝えてくれたと。その涙ぐましい報道と僕が実感をするのが、限りある人数の中で精一杯にみんな働くわけですね。普通は記者クラブにいて、入ってくる情報をそのまま流す、こんな感じなのです。僕はさっきトヨタ自動車の広報の人と、小野（内閣副広報官）さんの話を聞いていて、要するにメディア研究は進んでいるわけですね。トヨタ自動車でも安倍内閣でも、メディアをどういうふうに使うかという研究は極まっています、うまくやっているわけです。記者は座っていれば情報が入ってくる。けれども、これではだめだというのが3.11だったはずですね。3.11を経験したことで、「涙ぐましい」という言葉になっているわけです。僕も「涙ぐましい」と、このように思うことがあるのです。東京新聞はいろいろなことをやりました。僕が一番思っているのは、特報部というのがあります。これは記者クラブに属さないで自分たちが独自で取材することになっています。こういうところから、(京都大学助教の)小出裕章さんとか…京大の原子力学者ですね。僕は大学に助教というのがあるとこの時初めて知りました。彼らは原子力学者として研究しているわけですね。それから現地の福島へ来る、調査をする、そして作業員から話を聞く。ひとつひとつ一生懸命やったということです。そういうことが積み重なって、「こういう努力がジャーナリズムに続けば必ずジャーナリズムは変わる」と、ジャーナリストの魚住昭さん（元共同通信記者）は言っています。

「涙ぐましい努力」というので、この新聞を見てもらいたいのですけど、これは衆院選公示の東京新聞の紙面です。「忘れない 誓う一票」と書いてありまして、『「傍観の悲劇」胸に刻む』とあるのが私の原稿です。そして写真があるでしょ？これは写真部の人撮ってきたものです。僕は原稿を書く時にこんな写真を使うなんて聞いてないのでね。それから、こういう見出しを付けるよということも聞いていない。『「傍観の悲劇」胸に刻む』ってなかなか情緒的な見出しです。普通はもうちょっと冷静な見出しを付けるのですが、かなり情緒的な見出しを付けています。あの写真は3.11の時から1年経っても午後2時26分で時計が止まったままになっていて…というよう

な写真ですよ。これは写真部の人が撮った写真ですけども、胸に訴えるものがありますね。想いが込もっているように思えるのです。この『「傍観の悲劇」胸に刻む』という僕の手稿の中で、その部分（見出し）を取ってくるという、そういうことは整理記者の感覚。それがやはり想いが込もっているのではないかという気がして、涙ぐましい紙面だと思っています。これは15通読者からお手紙をもらいました。「写真がすばらしい、そして原稿もすばらしい」と書いてありました（笑い）。そうではなく、写真と見出しがいい。僕が書いたのは『「傍観の悲劇」胸に刻む』というのは「専門家や行政におまかせしていたら、要するに命さえなくなってしまうのだよと言いたかった。考えることは考えようじゃないか」と。

それから原発の廃棄物。これも出続けるのだから、脱原発というのは論理的必然だし、倫理的な要請のあるものなのではないかと思います。

2. 眼前のデモを報じないメディアの病理

サリバンさんとは違うのですが、安倍政権の憲法改正は「これは国の形を変えてしまうから疑問ではないかと。よく考えよう」とこういう原稿です。これ15通来たというのは、僕の手稿では2番目（の多さ）なのですね。1番多かったのは30通来たというのがあります。

言いたいのは、国民生活者の立場に立った原稿を書いてくれるかどうかということだと思います。その東京新聞も、ここに「6月15日国会の官邸デモはなぜ報道されなかったのか」という見出しがあります。当時は野田首相でした。これは大飯原発の再稼働をするのですが、それはいかんというデモで6月15日夜に国会がいっぱいになったのですが、各紙とも1行も報道していないのです。それで、東京新聞読者応答室長の鈴木賀津彦に、読者から100件ぐらい「なんで報道しないのか」というものが来たのです。鈴木君はどう答えているかというと「これは圧力がかかったからではありません」、「忘れていたのです」と。要するに、デスクも取材しろと言わなかったのだということを書いたのです。どうしてそういうことが起こるかということ、官邸前で起こっているデモです。官邸の記者は400人はいるんですね、登録だけで。誰か見ているに決まっているのです、それから社会部の記者だって。このデモは東京新聞のすぐ前ですからね。何が起きているかということ、記者たちは記者クラブに所属してその取材をしているわけですが、こういうことが大変なことだというふうに思わない訳です。ここに現代のマスコミの病理があるわけです。本当にその記者たちは何をすべきかをもう忘れてしまっているわけですね。これが僕は象徴的な出来事だと思います。

その次に、これは朝日新聞が去年掲載した「社説は厳しく制御、監視しろ」という声欄の投書です。僕はこれを載せる朝日新聞も偉いと思います。これは何を書いてあ

るかという、3月31日付けで朝日新聞が消費税が必要だと書きました。少し説明しますと、当時朝日新聞の中には、論説は「消費税を上げろ」と言っている。それから編集の経済部の記者たちは「上げてはだめだ」と言っている。こういう対立があって、その中で朝日新聞の社説が「やはり消費税の増税は必要だ」と書いている。3月31日。そしてこれに対する投書です。これはなかなか知識がある人、よくわかっている人です。「お前たちの言っていることは分かっている」。「要するに社会保障の財源が必要だということは、私だってそんなことは分かっている」。「だけれども納得できないものがある」と言っているのです。

なぜ納得できないのかという、その政府が公共事業に金をばらまいているじゃないかと。それから少なくとも消費税は社会保障のためにと言っているじゃないかと。でもその社会保障へのプランは全く出されていないと言っているのです。この通りなのです。なぜだめかという、公約になかった、公約にしていないう。もう一つは、税と社会保障の一体改革が大まかになっていて、ごまかしだと。その投書はこうなっているのです。

どうして新聞離れが起こっているか。大手紙の社説はみんな「消費税を上げろ」と書いています。共産党機関紙の赤旗に言わせると「そんな社説はいらない」と言います。「そんな各社ごとの社説なんかいらない」と。これはやっぱり、財務省の手の内で動いているものではないかなと、僕もこう思っているのです。東京新聞は消費税だめだと言ってきましたが、新聞離れが進むのも仕方がない。

3. 忘れられた権力監視という原点

先日、「マスコミ市民」（という雑誌）から取材を受けました。その編集者が僕に「私は5年前に朝日新聞（の購読）をやめました」と、「そして東京新聞にしました」と言うわけです。こういう読者が少なくないのです。この背景には、僕は東京新聞（の紙面）がいいと言いたいんだけど、実際はそういう訳ではなくて、朝日新聞や読売新聞は自分たちの声を代弁してくれないと考える人がいるからだと思いますね。だから朝日から東京新聞へという人が多いのです。この原発報道で東京新聞は2万5000部増えたと言われているのですが、僕も聞いているだけで、正確なことは分かりません。分かりませんが、紙面によって部数が増えるということは、前代未聞だと思います。要するに、結局は初心原点に帰ることが大切なのだということだと思のです。僕らが権力を監視するっていう…おこがましいことは言いたくないんですけど、やっぱり権力をウォッチングしようじゃないかと。そして真実を追求しようじゃないかと。それとちゃんと国民の立場に立とうじゃないかというのが僕の立場です。僕の立場っていうのは、東京新聞および中日新聞の立場です。

そこに「ポチはケンブリッジの入れない、懷疑するネコに表彰状を出すんだ」と書

いておきましたが、これは神野直彦さんという財政学者が僕に教えてくれたことです。「ポチはケンブリッジ大に入れない」とは何なのかというと、忠実な犬はそんなのだからだということです。東京新聞論説副主幹の長谷川幸洋が「官僚との死闘七〇〇日」という本で「みんな記者がポチになってしまっている」ということを言っています。ポチになるということはすごく難しいことなのです。なぜかというと、相手の言ったことが即座に分からないといけない。だから優秀でないとポチにはなれないのです。相手の言ったことが分からなくて、考えるようではポチにはなれない。けれども、ポチばかりになっているから今の批判精神を欠いたジャーナリズムになってしまう、読者離れを起こしているのではないかと。確かに、優秀な人が毎日レクチャーしてくれて日常的に話していると、こうなりますよね。けれども、本当の記者になるためには、ポチではなくて懐疑するネコにならないといけない。これはずっと（大切な）テーマだと思います。

さっきサリバンさんが「日米同盟は本当に大切だし、最重要なパートナーだ」と言われました。僕も本当にそう思いますし、そうあってほしいと思います。しかし、東京新聞、中日新聞は安倍さんはかなり批判的で厳しい。まず第一の集团的自衛権、これはだめだと。憲法改正だめだと。それから秘密保護法案だめっていつているわけです。日米関係は本当に重要だと思うのですが、できるなら率直なことが言えるような関係になりたいと。ここで目指したいといっているのは、例えば日本の国民は、本当はこう考えているのだよということを知ってもらうことが僕らの義務ではないかと思うのです。政府や霞ヶ関の役人たちと話していると、それは日本の世論とちょっと違うのではないかと思うのです。沖縄の基地問題でもそうですが、東京では主要の全国紙は、霞ヶ関の官僚と同じことを言います。ところが、琉球新報や沖縄タイムスは地元住民の意見、感情を反映して本当のことを言う。僕もそう思うのです。日本の新聞は、地元根ざすことで正確なことが伝わると思っています。それから憲法改正でも全国紙は、例えば読売と産経は改正しよう、毎日、朝日は論憲です、憲法を考えようということです。それから僕のところ、東京新聞はだめだと言っているわけですが、それはそれぞれの立場、考え方があります。日本のだいたいの地方紙は憲法改正をいけないと言っています。安倍さんは多分そういうことも知っていると思いますね。本当のところは地元紙が伝えているのだと。僕らはそういう新聞にならなければいけないのではないかと思います。

長くなりましたが、3.11が教えたことは要するに「原点に帰る」ということ、こういうことだと思います。これができるかどうか、新聞が生き残るかどうかの重要なファクターになるのではないかと考えております。ありがとうございました。

（記録・西村慶）



講演する山田哲夫・東京新聞論説主幹

ジャーナリズムの転換点としての3.11

中日新聞論説担当兼東京本社論説主幹
山田 哲夫
2013.11.8

1 菊池寛賞
—果敢なるジャーナリズム精神とは何だったか—

- ・画家 安野光雄氏
「わたしたちは東京新聞のおかげで、まだ希望をつないでいる」
- ・特殊部という存在、原子力学者の発見・発掘、原発作業員日記、電力不足キャンペーンのなかで
- ・6.15、国会、官邸前デモはなぜ報道されなかったのか
- ・割り切れない社説、そして新聞離れ



1 菊池寛賞
—果敢なるジャーナリズム精神とは何だったか—

- ・画家 安野光雄氏
「わたしたちは東京新聞のおかげで、まだ希望をつないでいる」
- ・特殊部という存在、原子力学者の発見・発掘、原発作業員日記、電力不足キャンペーンのなかで
- ・6.15、国会、官邸前デモはなぜ報道されなかったのか
- ・割り切れない社説、そして新聞離れ



1 菊池寛賞
—果敢なるジャーナリズム精神とは何だったか—

- ・画家 安野光雄氏
「わたしたちは東京新聞のおかげで、まだ希望をつないでいる」
- ・特殊部という存在、原子力学者の発見・発掘、原発作業員日記、電力不足キャンペーンのなかで
- ・6.15、国会、官邸前デモはなぜ報道されなかったのか
- ・割り切れない社説、そして新聞離れ

社説は厳しく政府の監視を

——山田 哲夫——

「わたしたちは東京新聞のおかげで、まだ希望をつないでいる」

（以下、社説本文の抜粋）

2 読まれ頼られる社説目指して
—初心、原点にかえる—

- ・ポチはケンブリッジに入れぬ、懐疑するネコに表彰状
- ・全国紙の消費税増税と小泉純一郎元首相の脱原発
- ・権力の監視、調査報道、そしてオンナ・コドモのジャーナリズム、生活調査報道
- ・井上ひさし氏、「難しいことをやさしく」「やさしいことを深く」



2 読まれ頼られる社説目指して
—初心、原点にかえる—

- ・ポチはケンブリッジに入れない、懐疑するネコに表彰状
- ・全国紙の消費税増税と小泉純一郎元首相の脱原発
- ・権力の監視、調査報道、そしてオンナ・コドモのジャーナリズム、生活調査報道
- ・井上ひさし氏、「難しいことをやさしく」「やさしいことを深く」

終